

「大学生心理学」の構築

－青年心理学と大学教育学の架橋－

企画者 山田剛史 (神戸大学大学院総合人間科学研究科)
企画者 奥田雄一郎 (中央大学大学院文学研究科)
話題提供者 山田剛史 (神戸大学大学院総合人間科学研究科)
話題提供者 奥田雄一郎 (中央大学大学院文学研究科)
話題提供者 尾崎仁美 (京都ノートルダム女子大学人間文化学部)
指定討論者 都筑学 (中央大学文学部)
指定討論者 溝上慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター)
司会者 白井利明 (大阪教育大学教育学部)

本 RT では「大学生心理学(University Student Psychology)」という新たな学知の体系化の可能性について議論したいと思う。「大学生心理学」という用語自体は、都筑や菊地(1996)、溝上(2001)において用いられ、その意義・重要性が指摘されてきた。しかし、諸学問領域の中でどのように位置づけられ、どのような研究がその範疇に含まれるのかといった具体的な議論はなされていない。そこで、これまでの議論を発展継承し、大学生に特化した心理学研究のあり方を提唱する。本 RT では、「大学生心理学」の定義・射程・ニーズといった基盤整備を行うこと、その上で青年心理学・生涯発達心理学の視点から、大学生心理学のあり方を探ること、さらに、具体的な大学生心理学研究を例示し、この領域が大学教育の現場(フィールド)に寄与する可能性についても検討することを目的とする。

1. 「大学生心理学」の定義 (山田剛史・奥田雄一郎)

「大学生心理学」の定義を簡潔に述べるなら「“大学生自身の視点” “大学生固有の文脈” からのアプローチを目指した青年心理学の一分化体系」である。つまり、第一に、従来の「大学生の心理学」のような研究者側の外在的視点から大学生を捉えるのではなく、大学生自身の内面的視点からのボトムアップによるアプローチを目指し、第二に、大学生を、彼らを取り巻く社会的文脈から切り離して考えるのではなく、むしろその文脈を積極的に取り入れることによって大学生研究を目指す心理学的アプローチである。

2. 「大学生心理学」の基盤整備①－その射程と青年心理学的視点 (山田剛史)

大学生心理学の射程：「大学生心理学」は誰に向けて発信されるものなのか。大別すると、第一に、大学教員を想定した場合、大学生心理学的アプローチによって見えてきた問題点を提示することで、関わり方の在り方への提言を可能とし、第二に、大学生を想定した場合、大学生心理学的アプローチによって得られた大学生の特徴を提示することで、彼らの自己理解・自己形成への支援を可能とし、第三に、研究者を想定した場合、大学生心理学的アプローチによって得られた大学生の心的ダイナミクスを提示することで、認識論的・方法論的提言を可能とする。

大学生心理学構築のための青年心理学的視点：従来の青年心理学においては、脱文脈的な青年心理学やとりあえず大学生のデータを扱っているといった「大学生の心理学」が混在している状況で(文脈性問題)、領域固有の議論になってしまったり、当の大学生や大学教育への還元を意図しない対象者から遊離した研究のための研究(還元性問題)が行われて

いたりする。これらの指摘は、青年心理学の歴史の中で(特にその初期において)常になされてきている。科学的青年心理学研究への傾倒によって損なわれていった古くて新しい重要な問題を、改めて本気で考えるための突破口として「大学生心理学」を想定し、その構築のために青年心理学からの分化と再統合を行うことが急務の課題である。

3. 「大学生心理学」の基盤整備②ーそのニーズと生涯発達の視点 (奥田雄一郎)

大学生心理学のニーズ：近年の大学・大学生を取り巻く急激な状況の変化は、大学・大学生に関する様々な問題を引き起こしている。それに伴い心理学へのニーズもより多様化している。大別すると、第一に、大学教育においてのものである。複雑化する大学教育問題に対して、制度や研究者側の外在的な視点による議論の限界が指摘されている。第二に、それは大学生自身によるものである。従来の「大学生の心理学」による知見は、その多くが研究者の外在的視点な視点によるものであり、大学生自身がいかにかその大学という文脈を経験しているのかという内在的な視点に欠け、その知見が大学生自身による大学生理解に結びつきにくかった。第三に、それは大学生を取り巻く社会、例えば大学生の進路選択において大学生が卒業後に参入する大学院、企業などにおいてである。

大学生心理学構築のための生涯発達心理学的視点：従来の生涯発達心理学においては、第一に、大学生は青年期研究のある部分的対象の一形態としてのみ扱われ、そこでは大学生固有の文脈が積極的に取り入れられてきたとは言い難い。その一方、現代社会において、大学という時空間は多くの青年によって経験される場となってきている。そのため、現代社会を生きる人々にとって、大学という時空間がどのように個人の人生の中に組み込まれていくのかといった視点からの研究が必要となる。第二に、従来の「大学生の心理学」においては、大学生を明らかにするための研究は大学生に調査する、といったようにその対象が大学生に限られていた。それに対し、生涯発達心理学の視点からは、人生という時間軸の中で、大学・大学生を研究する可能性を示唆することができる。

4. 「大学生心理学」の研究例ー大学生の学業意欲に関する研究 (尾崎仁美)

大学生の教育や大学での授業に携わる者にとって、学生たちの学業への意味づけや意欲の問題は大きな関心事である。学生たちは大学での学業や授業をどのように捉え、それらにどのように取り組んでいるのであろうか。また、いつ頃、どのような要因によって学業への意欲が低下(あるいは上昇)するのだろうか。

これまでの研究において、学生は、入学期には学業・キャンパスライフともに肯定的な態度を持っているが、1年生の後期から授業への意欲が低下すること(溝上, 2003)、また、1~3年生を比較すると、1年生よりも2,3年生で授業への意欲低下が見られること(後藤, 2003)などが報告されている。また、半澤(2004)は、2年次における専門科目の受講によって、1年次にみられていた意欲喪失が解消されていくケースがあることを追跡調査によって明らかにしている。

こうした先行研究をふまえ、本発表では、大学生の学業への意欲という問題に対して、それを学生自身がどう捉えているかという視点からアプローチした研究を報告し、それをもとに、大学生心理学のあり方や現場への貢献について議論ができればと思っている。

最後に：本 RT では、大学教育や大学生の心理に関心を持つ教育者・研究者の問題意識を共有する場となるよう、フロアの先生方との討論の時間を出来るだけ多く取ってじっくり議論したいと考えています。